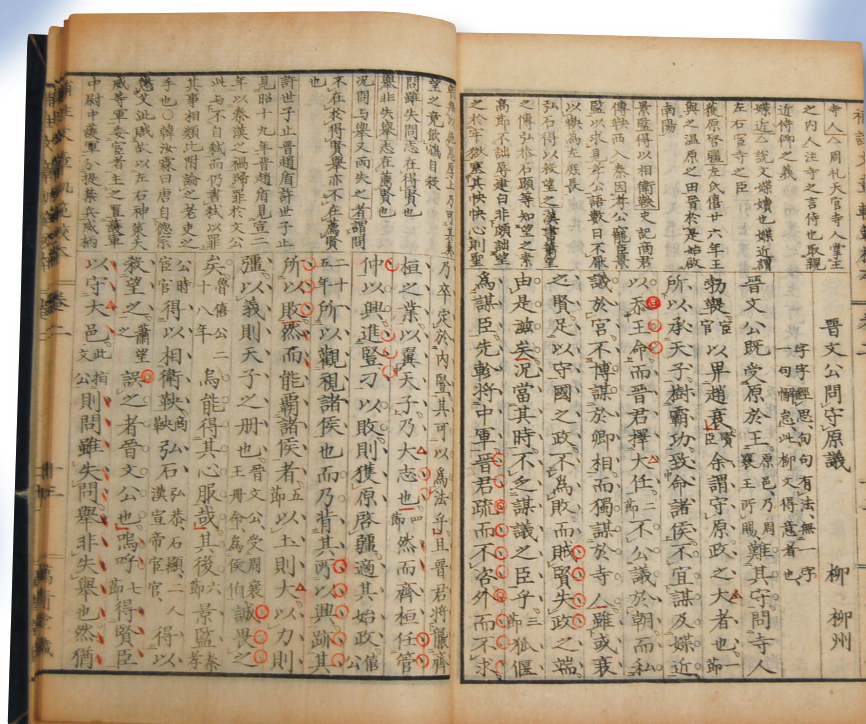


二松学舎大学附属図書館
quarterly report

季報



『補註文章軌範校本』より

目次

- ❖ P2 図書館と〈森〉 谷口貢
- ❖ P3 情報デザインとしての編集 松本健太郎
- ❖ P4 ミステリーと論文(或いはレポートも) 戸内俊介
- ❖ P5 研究生活を振り返って 咲川可央子
- ❖ P6 新スタッフ紹介／九段図書館だより
- ❖ P7 レポート、論文作成の参考資料(近年入手したものを中心に)
- ❖ P8 図書館だより

No.86
2013(平成25)年
7月

図書館と〈森〉

文学部 国文学科 教授 図書館長 谷口 貢

先日、新しい国語辞典の編集に情熱を注ぐ主人公を描いた『舟を編む』という映画を見る機会があった。映画の中で映し出されていた1990年代の半ば頃の出版社の編集部には、まだパソコンや携帯電話などは存在していなかったので、ここ十数年におけるIT機器の普及について再認識するとともに、職場環境が大きく変化してきていることを実感させられた。

映画『舟を編む』は、三浦しをん氏の原作を映画化したもので、辞書編纂の舞台裏を丁寧に描いている。現代語を積極的に採用して「今を生きる辞書」を作るという編集方針の下に、15年かけて完成させるという物語である。次々と生み出される新しい言葉を収集し、それを辞書の語彙として採択するかどうかを検討する。さらに辞書に入れる言葉の一つ一つに語釈を付けていく。私たちが手にする国語辞書には、編集に携わる人々によって気の遠くなるような努力が営々と積み重ねられていたのである。IT機器の情報処理能力がさらに高度になれば、編集作業がより簡便化していくことはまちがいないが、辞書作りにかける人々の情熱と努力がなければ、やはり優れた辞書はできないのではないだろうか。

辞書に限らず書籍には、それぞれ原稿を書いた人がいるだけでなく、編集者が介在し、装丁や印刷・製本を行った人々がいる。さらに書籍の流通に係わる人々を含めれば、一冊の本が私たちの手元に届くまでには、実に多くの人間が関与していることになる。書籍には、著者をはじめ制作に携わった人々のさまざまな思いが込められていることも確かなのである。

図書館は、それぞれ固有の相貌をもつ書籍などを体系的に所蔵して利用の便益をはかる文化施設として設置されたものである。ユニークな語釈で知られる『新明解国語辞典』（第七版）の「図書館」の語には、「図書・資料・フィルムなどを集めて保存する一方で、利用者に見せたり貸したりする施設」と解説されている。語釈に「フィルム」を入れて新味を出そうとしたとみられるが、現在の図書館の状況を考慮すれば、さらに「電子情報」という文言を追加するのがよいかもしれない。

図書館は、その人の体験によってさまざまに喩えられる

ことと思われるが、私が図書館に抱くのは〈森〉のイメージである。少年時代を新潟県の山間(やまあい)の集落で過ごしたので、森は身近なものであった。とくに里山は、タケノコやゼンマイ・ワラビなどを採取したり、柴刈りや炭焼きなどが行われたりして、地域の生活と密接に結びついていた。また子どもたちにとっても里山は、チャンバラごっこをはじめカブトムシやセミなどを捕獲して遊ぶ場になっていた。ときには友人たちと探検と称して、普段行くことのない奥山に分け入ることもあった。森には、さまざまな鳥獣草木が棲息繁茂し、それらは季節によって変化を遂げている。現在、故郷の森は人手が入らなくなって荒廃してきているが、私にとって森は自然の豊かさを学ぶ場であり、未知の世界に誘う不思議な場であった。

私が民俗学という学問に惹かれたのは、郷里における〈森〉の体験が大きく作用していたといえる。また、これまで各地のフィールドワークに出かけると、必ずといってよいほど地元の図書館を訪れて、図書館員の方々に調べたい事柄の話を聞き、郷土資料関連の文献を閲覧させてもらった。私にとって図書館は、郷里で体験した〈森〉のように、さまざまな書籍等を所蔵する〈森〉であるとともに、新しい知見や発見をもたらす文化の〈森〉であった。

本学は昨年、創立135周年を迎え、長期ビジョンとして「N'2020プラン」を策定した。その中で、大学の教育改革の一環として「国語力」の養成が掲げられている。この「国語力」を身につけるためにも、大いに図書館の〈森〉を活用していただきたい。附属図書館には、現在、九段と柏の両館を合わせて約34万2千冊の図書が所蔵されている。図書館の〈森〉は、多くの人たちに利用されることによって、〈森〉の価値が高まり、より活性化されていくものといえよう。

情報デザインとしての編集

文学部 国文学科 専任講師 松本 健太郎

つい先日、新曜社より『ゲーム化する世界——コンピュータゲームの記号論』が発刊された。これは2011年に本学を会場校として開催された日本記号学会第31回大会の成果をまとめたものであるが、私はこのプロジェクトに2010年以来かわり、全国大会の実現および本書の刊行をもって、ようやく肩の荷がおりた心境である。

いま、なぜゲームを考えることに意義があるのか。『ゲーム化する世界』というタイトルが示唆するように、現代社会においてはゲーム的な想像力がそれを駆動させる特定のメディアウムのフレームを超えて多種多様な領域に浸透しつつある、という直感が本書の構想の起点となっている。「たとえば買い物をするカードにポイントが貯まる。あと少し貯まれば何か特典があるとわかると、私たちは特に欲しくなくてもポイントのために何かを買ったりする。その時、私たちは本当に『買い物』という行為をしているのだろうか？ それとも『買い物ゲーム』をプレイしているだけなのだろうか？」——美学者の吉岡洋氏（日本記号学会会長、京都大学）が本書の冒頭でそう問いかけるように、われわれの日常のなかにゲーム的な論理、あるいはゲーム的な想像力が干渉する状況はさほど珍しいことではなくなった、といえるだろう。それは、まさに「ゲーミフィケーション」という言葉、すなわちゲーム的なデザインやインターフェースを経済活動や教育活動などに応用しようとする研究の進展によっても示唆されるとおりである。

本書はコンピュータゲームというメディアウムを内在的に分析するというよりは、むしろ、そのメディアウムを基点にわれわれ現代人のアイデンティティやリアリティの組成を解明することを目指して企画された。ゲーム会社ハドソンの創業者である工藤裕司氏、精神科医の香山リカ氏（立教大学）、そして日本におけるゲーム研究をリードされている吉田寛氏（立命館大学）をはじめとして、多彩な方々に原稿をお寄せいただきながら、ゲーム文化のアクチュアリティを照射しうる、なかなか良い本を仕上げる事ができたと自負している。

さて、私が書籍の編集に携わるのは、ナカニシヤ出版の「メディアの未来」シリーズから刊行された『メディア・コミュニケーション論』（国際基督教大学の池田理知子先生との共編）、および『メディア文化論』（本学の江藤茂博先生、奈良県立大学の遠藤英樹先生との共編）に続いて三冊目となる。一冊の

本を編集するという作業は、相当の時間と労力を費やす作業でありながら、私自身それを通じて多くを学ぶことができる貴重な機会であるとも実感している。様々な先生方に執筆をお願いし、原稿をとりまとめて校正を加え、他の執筆者や編集者とやりとりを重ねながら刊行を目指す——つまり本を編集するという仕事は、私にとっては他者との関係性のなかで新たな言説を紡ぎだしていく「情報デザイン」のプロセスともいえる。

アメリカ系の記号論の創始者として知られるC・S・パースによれば、人間とは記号にもとづいた知覚や認知や推論の連続体であると理解される。そしてその過程で派生する、記号から記号へと向かう連続的な解釈プロセスのことを、彼は「セミオーシス（記号過程）」と位置づけている。そのような記号観＝人間観を前提とするならば、編集作業をつうじて情報を構造化していく営為とは、自らのアタマのなかで展開されるセミオーシスを他者の言説によって、あるいは多様な媒介テクノロジーとの関わりによってモデリングしていく過程、すこし大袈裟に言えば、自分そのものを編集していく過程に他ならないともいえる。

そのような情報編集（ひいては自己編集）のプロセスは、大学時代に身につけるべき各種メソッドの延長線上に位置づけるのではないだろうか。たとえば本学の基礎ゼミナールで学生たちが身につけるであろうスタディスキル——たとえば情報のインプットに関しては「ノートテイキング」や「リーディング」の技法、あるいは情報のアウトプットに関しては「論文執筆」や「プレゼンテーション」の技法など——は、情報の出入力の効率化、あるいは構造化を促進させるための情報デザインのトレーニングの機会でもある。私自身の感覚からいえば、書籍を編集するという上述の営為も、基礎ゼミのなかで学習スキルを身につけるといいう営為も、それほど大差はないのである。



ミステリーと論文(或いはレポートも)

文学部 中国文学科 専任講師 戸内 俊介

十代のころよりミステリーを愛読してきた。国内の作品が多く、例えば、海野十三、夢野久作、松本清張、内田康夫、島田荘司、森博嗣、京極夏彦などが挙げられる。海外の作品は、その翻訳文体が学生時分の私にはまだ早かったのか、読みにくく感じることも多く、それほど種類は読んでいないが、それでも、アガサ・クリスティやディクソン・カーあたりは多少嗜んだ覚えがある。

長じてより、大学に入り、レポートや論文の課題をこなさなければならなくなった。これは大学に入った若者全ての定めであろう。最初は文章を書き慣れていないこともあって、苦痛も多く、いやいや書いていた。が、ある時ふと思ひ浮かんだ。

「論文とミステリーは、似ているのでは？」

ミステリーでは、ほとんどの場合、何らかの事件が起こる。その後、話の展開とともに、その事件のあらましが紹介され、さらに探偵役によって、調査される。作者はところどころに伏線を張る。読者は犯人が探偵役により指摘される前に、その伏線などを頼りに文章に書かれている内容から犯人を「論理的に」推理できる。最後に探偵役は、その犯人及び、犯行に至った背景、犯行の手口に対する自らの推理を綿密に披瀝する。

一方、論文・レポートというのは、まず何かしら問題提起しなければならない。「問題」は「謎」と呼び換えても良い。これがミステリーでは容易に解決できない「謎」を含んだ「事件」にあたる。次に論文・レポートでは、その「謎」に対し書き手がどのように調査し、結論を導き出そうとしているのか等、結論に至る道筋を示す。これが、ミステリーでは探偵役の調査である。論文・レポートで書き手は自らを探偵役の如くして「謎」に迫っていくのである。さらに論文・レポートでは、この後、「謎」に対する結論、及びなぜ書き手がその結論に至ったかを「論理的に」説明する。これはミステリーでは、犯人の開示、及びなぜ探偵役がそのような結論に至ったかという、謂わば解決編にあたるのである。

さらに、ミステリーも論文・レポートも論理的に破たん

しては、駄作、という認定がされる。これもまた両者の類似点である。

このようなことを意識して以降、「だったら、いっそ面白く書いてやれ!」、という遊び心が生まれた。また、過去自分が読んできたミステリーのロジックやプロットが援用できるのではないかと考えもした。

例えば、ミステリーの中には犯人を先に提示するものがある。いわゆる「倒叙」ものである。具体的な作品で例をあげれば、古畑任三郎や刑事コロンボがこれにあたる。最初に犯人が判明している場合、問題の焦点は、犯罪の動機や手法に向けられる。論文・レポートでも仮説を先に提示し、その後で、個々の現象や用例をその仮説を用いて分析するものが少なくない。

このほか、通常のミステリーでは犯人が最後に提示される。論文・レポートでも、最後に結論を持ってくるのが通例であり、その結論に向けて、書き手の経た調査や思考を展開していくが、これはミステリーでの探偵役の事件調査と一致する。

最も面白いのはやはり、最後にどんでん返しがある、或いは誰もが予期しない結末で幕を閉じるミステリーであろう。但し、これを論文・レポートで再現するのはなかなか難しく、どんでん返しのある論文というのは、私自身もまだ成功していない。そのうち一本くらい、読者をして「やられた!」と思わせる論文を書いてみたいと夢想している。

こんなことを考えながら執筆に取り組むと、少し気分が楽になる(ような気がする)。

加えて気づいたことは、同じ内容でも、情報の出し方や組み立て方を変えることで、読み手に与える印象がガラッと変わるといことである。ミステリーというのは、情報を出す順番が命である。肝となるトリックや事件成立の謎を最初から開示しては、何の面白味もない。ミステリーを読むことは最も効果的な情報の出し方を身に着けられることにつながると、私は思う。

ただここ数年、忙しさに追い回され、ミステリーを讀んで「勉強」する時間を作れていない。実に残念である。

研究生生活を振り返って

国際政治経済学部 国際政治経済学科 専任講師 咲川 可央子

私の専門分野は「開発経済学」「経済発展論」という、経済発展のメカニズムの解明と発展をもたらす政策の探求を目指す学問領域である。発展途上国に特有の諸問題を理解し、貧困とは何か、経済発展を阻む要因は何か、経済発展を遂げるためには何が必要か、という問いへの答えを探求する学問である。「経済」という単語がついているが、経済学のみならず、政治、歴史、地理、文化など様々な領域と関連しており、大変幅広い学問領域である。私は、この学問領域に、1. 経済理論、2. 実証的方法論、3. 国や地域の特徴の理解、という3本の柱をたてて研究を進めてきた。もう少し丁寧に説明すると、1. についてはミクロ経済学、マクロ経済学、国際経済学、開発経済学、2. については統計学、計量経済学、数学、3. についてはラテンアメリカ地域、特に大学院修士課程の2年余りを過ごしたメキシコについての知識を深める努力をしてきた。と言っても、大学3年次に「開発経済学」に興味を持って以来、上記の3本柱をたてるに至るまで、様々な試行錯誤と紆余曲折を経ている。

その間、学生という立場から、あるいは社会人、研究者、大学教員という立場から、レジュメ、レポート、論文を作成する機会、調査・研究内容を発表する機会が度々あった。この原稿を書くにあたり過去の経験を振り返ると、初めて論文を書いた時の拙さや初めて研究報告をした時の緊張を思い出して少々恥ずかしいが、「何事もラーニング・バイ・ドゥーイングである」と改めて感じる。二松学舎大学の学生の皆さんには、授業やゼミ、大学内のみならず外部との接触を通じて、レポート作成や発表の機会を積極的に得ることができたら、と思う。

最初に刺激を受けたのは大学学部時代のゼミであろう。大学生活で最も「主体的に」学ぶ場であった。毎週のレジュメ作りは大変であったが、本を読むだけでなく自分なりにまとめることは資産となり、その後大学院に進学するきっかけとなった。メキシコ大学院大学(El Colegio de México)の経済学研究科修士課程時代にはスペイン語で発表、レポートや修士論文の作成をした。同大学には「10段階の8の成績を維持しなければ退学」という独自の厳しいルールがあり、入学した際に50人弱在籍していた同期生も2年後には15人に減少した。ただし、在籍する経済学研究科の学生全員が奨学金を給与されていた。最後まで残った周りの同期生は優秀で、出身大学で主席だった人が何人もいた。といっても一般的な優秀さではなく、様々なタイプの優秀な人がいた。機械のごとくミスを犯さない優秀さを持つ人もあれば、数学オリンピックのメキシ

コ代表であるほどの能力があるのに少々怠惰で成績に無頓着な人もいた。読書が好きで単語力があり、その人と話すと知らないうちに私のスペイン語も上達するような人もいた。何をしても「とにかく速い」人もいた。私は同期で唯一の留学生であり言葉のハンディもあったが、切磋琢磨する仲間恵まれ、スペイン語での発表やレポート作成を乗り越えることができたと思う。修士論文は帰国後にスペイン語で作成した。指導教授と電子メールでやりとりをしながら指導を受けると同時に、日本の学会で発表してコメンテーターの先生からご意見をもらい、論集に投稿して査読者からコメントをもらいながら修正し、修士論文完成に至った。

その後、神戸大学の博士後期課程に進学した。博士後期課程は取得すべき単位数は少なく、指導教授の指導を受けながら博士論文を完成させるための課程である。指導方法は指導教授によって異なるが、私の指導教授は、ゼミを毎週1回開催し、ゼミメンバーの誰かが自主的に発表し、それに対して指導教授を筆頭に全員で討論する形式をとった。ゼミには、指導教授と博士後期課程に在籍する学生の他、神戸大学で教鞭をとる若手の先生方やOBも参加していた。指導教授は、自由と主体性を重んじつつ、研究を進めるインセンティブが自然に与えられるような環境を作っていたと感じる。経済学や議論をするのが好きな方ばかりで、時間の制限はなく、3時間通して議論が続くこともしばしばあった。発表に向けて勉強するので研究のリズムを作りやすく、自分1人では解決できず煮詰まった時には、「ゼミに持っていったら、解決への糸口が見つかるかもしれない」という拠り所もなった。

紙幅の制約により、その他のエピソードは割愛する。改めて感じるのは、自分をどのような環境に置くかは重要であるということである。私たちは様々な人から影響を受けて生きている。上記の例で言うならば、指導教授との縦の関係、学生同士の横の関係、指導教授以外の先生や専門家との斜めの関係により私は多大な影響を受けた。研究だけでなく、スポーツや趣味においても、どのような環境に自分をおくか、自分1人で集中する時間と同志と切磋琢磨する時間のバランスをどう保つかを自分なりに模索してみるといいかもしれない。楽しみながらも(時には涙するかもしれないが(?))ハリを保ちつつ前進することにつながると思う。二松学舎大学の学生の皆さんが、自分にとって良き師や仲間を見つけて、有意義な日々を送ることを望む。

新スタッフの紹介

九段・柏両図書館に
新しいスタッフが参りました。
ひと言ご挨拶を
させていただきます。

田内梓乃（九段）

はじめまして！4月より九段図書館に配属になりました。夕方以降、図書館のあちこちを行ったり来たりしています。皆様のお役に立てるよう日々精進しておりますので、ぜひお気軽にお声をかけてくださいね。

中村友美（柏）

4月から柏図書館に配属になりました。直接お会いする機会は少ないかもしれませんが、縁の下での力持ちとして皆さんの学習・研究を支えています。柏図書館までぜひ足をのばしてください。お待ちしております。

大友朝美（九段）

いつもあたふたし、ご迷惑をおかけしております。早く対応できるよう頑張りますので、どうか宜しくお願い致します。

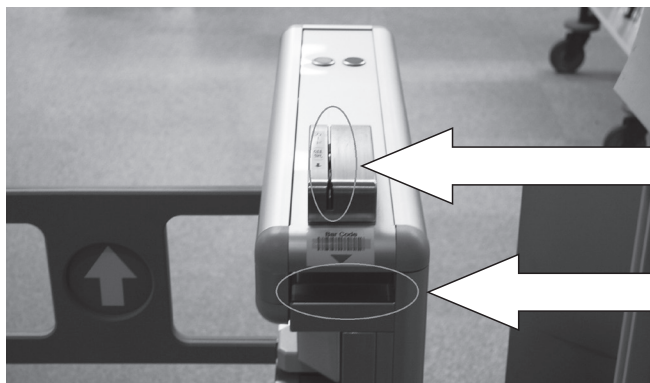
九段図書館だより

4月からこんなところが変わりました。

○マイライブラリの登録が簡単になりました。詳しくはカウンターのスタッフにお尋ねください。

○入口のゲートが変わりました。

磁気のほか、バーコードをかざしても通れるようになりました。



磁気面を内側にして、カードを奥から手前に引きます。

バーコードをかざします。

○学習支援用PCが置かれました。



入口から入って右奥のカウンター席にあります。合計15台のワードやエクセルも使用できるPCです。4月、5月とたくさんのご利用がありました。皆様の学究にお役立てください。

レポート、論文作成の参考資料（近年入手したものを中心に）

- ベッカー先生の論文教室（ハワード・S・ベッカー 著）慶應義塾大学出版会 2012 002.7-B [九]
 - 文献調査法：調査・レポート・論文作成必携：情報リテラシー読本 第5版（毛利和弘著）毛利和弘/日本図書館協会（発売）2012 015.2-B-A [九]
 - 論文の教室：レポートから卒論まで 新版（NHKブックス：1194）（戸田山和久著）NHK出版 2012 816.5-R-A [九] [柏]
 - レポート論文のStart line：書ける自分を作る（居駒永幸 [ほか] 編）おうふう 2012 816.5-R [九]
 - 経済論文の作法：勉強の仕方・レポートの書き方 第3版（小浜裕久，木村福成著）日本評論社 2011 330.7-K-A [柏]
 - ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方（石井一成著）ナツメ社 2011 816.5-Z [柏]
 - 社会科学系のための「優秀論文」作成術：プロの学術論文から卒論まで（川崎剛著）勁草書房 2010 307-S [九]
 - 経済論文の技法：データが語る・データで語る（小浜裕久著）日本評論社 2009 330.7-K [九] [柏]
 - 留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック（二通信子 [ほか] 著）2009 東京大学出版会 816.5-R [柏]
 - 短文・小論文の書き方：大学生の文章鍛練法（有斐閣新書：[C-26]）（宇野義方 [ほか] 著）有斐閣 2009 816.5-T [柏]
 - 「知」の方法論：論文トレーニング（岩波テキストブックス：α）（岩崎美紀子著）岩波書店 2008 816.5-C [九]
 - はじめての論文作成術：問うことは生きること 3訂版（宅間紘一著）日中出版 2008 816.5-H [九]
 - 論理的な英文がスラスラ書けるようになる本：メールから小論文・レポートまで（小野田博一著）日本実業出版社 2008 836-R [九]
 - レポートから卒論までWord & Excel講座：IT時代の基礎知識（石田千代子著）新紀元社 2007 007.63-R [九]
 - これからレポート・卒論を書く若者のために（酒井聡樹著）共立出版 2007 816.5-K [九]
 - 論文の書き方：わかりやすい文章のために（小笠原喜康著）ダイヤモンド社 2007 816.5-R [九]
 - 英語で書く論文・レポートWord 2007活用法：Word 2007を利用したレイアウト・スタイル設定法（先輩が教える:series15）（豊沢聡著/奥村秀樹英文校正）カットシステム 2007 836.5-E [九]
 - 論文・小論文の文章作法がわかる本：ポケット解説：小論文、レポート作成のルールとコツを伝授！（Shuwasystem pocket guide book）（有地智枝子著）秀和システム [2006] 816.5-R [九]
 - 論文・レポートの文章作成技法：論理の文章術（古郡廷治著）日本エディタースクール出版部 2006 816.5-R [九]
 - だれも教えなかったレポート・論文書き分け術（SCC books）（大竹秀一著）エスシーシー 2005 816.5-D [九]
 - ピアで学ぶ大学生の日本語表現：プロセス重視のレポート作成（大島弥生 [ほか] 著）ひつじ書房 2005 816.5-P [九]
 - アピールできるレポート/論文はこう書く!：書く見せる報告する：レポートから学術論文まで：すべてのコツが1冊でわかる!（滝川好夫著）税務経理協会 2004 816.5-A [九]
 - 大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版（吉田健正著）ナカニシヤ出版 2004 816.5-D-A [九]
 - レポート・論文作成のための引用・参考文献の書き方（藤田節子著）日外アソシエーツ 2004 816.5-R [九] [柏]
 - レポート・卒論のテーマの決め方（三井宏隆著）慶應義塾大学出版会 2004 816.5-R [九]
 - レポート作成法：インターネット時代の情報の探し方（井出翁，藤田節子著）日外アソシエーツ 2003 816.5-R [九] [柏]
 - 大学生のためのレポート・論文術（講談社現代新書：1603）（小笠原喜康著）講談社 2002 816.5-D [九]、080-KG-1603 [柏]
- ※[九] は九段図書館、[柏] は柏図書館に所蔵しています。
- この他にもたくさんの文献があります（特に請求記号816.5の辺り）。自分に合う資料を探して、レポートや論文の作成に活用して下さい。

図書館だより

図書館カレンダー 開館日・開館時間は変更することがあります。詳しくは図書館ホームページをご覧ください。

九段図書館

7月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

■ 8:40～21:50

■ 9:00～16:50

■ 閉館

8月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

■ 8:40～21:50

■ 9:00～16:50

■ 9:00～19:00

■ 閉館

9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

■ 8:40～21:50

■ 9:00～16:50

■ 9:00～19:00

■ 閉館

10月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

■ 8:40～21:50

■ 9:00～16:50

■ 閉館

柏図書館

7月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

■ 9:15～16:30

■ 閉館

8月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

■ 9:15～16:30

■ 閉館

9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

■ 9:15～16:30

■ 閉館

10月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

■ 9:15～16:30

■ 閉館

※8/6(火)～8/31(土)は、非構造部材耐震化工事のため閉館(柏)。

※9/14(土)は、入試のため閉館(九段)。9/23(月)は授業開講のため開館(九段)。10/10(木)は、創立記念日のため閉館(九段、柏)。

10/14(月)は、授業開講のため開館(九段)。

表紙解説

表紙の書は『文章軌範』に注をつけたものです。『文章軌範』は、中国の昔の官吏登用試験である「科挙」に合格するための模範文例集といったものです。昔も今も文章を書くために、皆苦労をしていたのでしょうか。

レイトデーのお知らせ

今年度も夏期休業期間中に、レイトデーがあります。
昨年度も週に1日ありましたが、今年度は週に2日となりました。
ご利用をお待ちしております。

編集後記

新たに図書館長に就任された谷口先生をはじめ、松本、戸内、咲川各先生、新スタッフの皆さんのご寄稿に感謝致します。おかげさまで今年度最初の「季报」を世に送り出すことができました。お楽しみいただければ幸いです。

(S・A)

二松学舎大学附属図書館

季報

第86号

発行日 平成25(2013)年7月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話:03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話:04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話:03-5227-8333